

## 中期フルクサスのマルチプル事業における使用と流通のダイナミズム

青木 識至 (東京大学)

---

フルクサスとは、アーティスト兼デザイナーのジョージ・マチューナス (George Maciunas, 1931-1978) を旗頭に、1960年代初頭から1970年代後半にかけて興隆した国際的なアート・コレクティブである。ミニマルなスコアに基づく「イベント」の実践で知られるフルクサスであるが、近年では、とりわけ中期に本格化した物質的なマルチプルの試みが注目されている。しかしながら、マルチプルの展開については、個々の作品が具体的に分析されているのみで、プロジェクト全体のダイナミズムを総合的に扱う議論はほとんどない。本発表は、フルクサスのマルチプル事業を、独自の販売網「フルックス・ショップ」との関係から包括的に検討することによって、それが保持する批判の射程を明らかにするものである。

フルクサスのマルチプルが本格的に生産され始めるのは、マチューナスがアメリカに帰国した1963年以降である。彼によって編纂された三つのアンソロジー作品《フルクサスI》(1964)、《フルックス・キット》(1965)、《フルックス・イヤール・ボックスII》(1967)は、フルクサスのマルチプルが集団的な共同事業として展開していたことを伝える。他方、より具体的な作品分析を行うならば、それらの作品内容が、受容者の触覚や嗅覚に働きかける多感覚的な「使用」の経験に依存していることがわかる。この特質は、1950年代末に実験音楽の手法をオブジェクトの配置に適用したジョージ・ブレクト (George Brecht, 1926-2008) の初期作品に由来するが、マチューナスは、こうしたオブジェクトと受容者のあいだの相互作用によって、誰もが日常生活のなかに芸術的事象を発見すると考えた。

このようにフルクサスのマルチプルは受容者の身体を媒介とした多感覚的な使用を期待する。しかしながら、それが現実的に使用されるためには、単に美術館やギャラリーに展示されるだけでなく、実際に商品として広く流通する必要がある。その意味において、「フルックス・ショップ」と命名された一連の国際的かつDIY的な販売網は、マルチプルが生活のなかで適切な仕方で機能するために不可欠な役割を担ったと考えられる。フルクサスの時代において美術市場はすでに、本来であれば批判者となるべきアヴァンギャルドの芸術すらも高級文化の一部として消費し始めていた。ゆえにフルクサスは、「ショップ」というオルタナティブな流通システムを自ら構築することによって、日常生活のうちに美的経験を発見させるマルチプルの批判的機能を担保したのである。

以上のことを踏まえ、本発表では、中期フルクサスのマルチプルと「フルックス・シ

ヨップ」という国際的な販売網とのあいだの根本的な関係について考察する。そしてそこから、フルクサスのマルチプル事業を、1960年代後半以降にマルセル・ブロータースやハンス・ハーケらが展開する芸術の制度批判に先行する事例として位置付けることを提案する。